

日本語知覚補文テンスについての覚書き

—日英語の歴史的現在用法との関連において—(2)

尾野 治彦

目 次

0. 序
1. 聴覚と視覚におけるル形とテイル形
—知覚における認知のあり方をめぐって— (以上前号)
2. 澤田 (1997) の問題点をめぐって (以下本号)
3. 歴史的現在用法におけるル形
4. 英語における歴史的現在用法

2. ここで澤田 (1997) を検討してみることにしたい。澤田 (1997) は日本語の知覚補文を、「知覚動詞補文」「知覚名詞補文」「知覚関係節」の三種類に分類して、日本語知覚補文について考察しているが、結論として、「事象Pを見た」という日本語の知覚補文のテンスを明確にするには、次の三つの見た時点の区別が必要であるとしている (X = 知覚時点、Y = 語り時点)。

- (1) (i) 意識主体が知覚している時点 (= x)
- (ii) 意識主体が後で報告している時点 (= x')

よって、知覚のパターンには、「XP型」、「X'P型」、「YP型」の三種類があることになる。この三つの例としては、それぞれ次のような例をあげている。

(2) 「XP型」

- a. おしのは顔を挙げて、橋の方をみた。〔橋の中ほどに、俯伏せに地兵衛が仆れている〕のが見えた。 (藤沢周平：「黒い縄」)
- b. 〔あわただしく動きまわる〕武装した兵たちを見ると、お市はかつて信長の攻撃に備えた小谷城がこれと全く同じだったことを思い出した。 (遠藤周作：『女』)

(3) 「X'P型」

- a. 一瞬のことだったが、〔部屋の中の有明行燈に照らされたたつの眼が、はっきりと憎悪に光っていた〕のを、おしのはみてしまったのだった。おしのは倒れこむように布団に戻った。 (藤沢周平：「黒い縄」)
- b. お市は〔勝家が顔を横に向け、眼をしばたいた〕のを見た。剛勇で鳴らしたこの老武将の悲しみがじんとお市に伝わった。 (遠藤周作：『女』)

(4) 「YP型」

- a. 橋の中ほどに、地兵衛の骸が横たわっていたが、おしのはそれを見なかった。 (藤沢周平：「黒い縄」)
- b. はじめは、風が雨戸を鳴らしたかと疑った。だがすぐにそれが、〔小さいが規則正しく外から叩いた〕音であることに気付いた。 (藤沢周平：「黒い縄」)

問題は、この分類が知覚のパターンの有意義な一般化を捉えているか、ということであるが、本稿の見地からは、(i)の「XP型」と(ii)の「X'P型」に問題があるように思われる。まず、(i)の「XP型」では、ル形とテイル形が区別なく扱われ、同種の知覚を表すとみなされているという問題点がある。次に、(ii)の「X'P型」であるが、はたして、このパターンは(iii)の「YP」型とはっきり区別できるものなのだろうか。

まず、(i)の「XP型」であるが、(2a)の「仆れている」のテイル形と(2b)の「動きまわる」のル形を区別ないものとして扱う澤田の見解は、ル形とテイル形を、§1で論じたような、「知覚」と「観察」という異なった知覚のあり方として区別してきた本稿の立場からすれば、受け入れることのできないものであるといえる。例えば、澤田では、次のようなル形とテイル形についても同一のものとして扱われ、その違いについては、何等問題にされていない。⁽⁴⁾

- (5) a. [子供が無邪気に遊ぶ] 光景が目に浮かぶ。
- b. [子供が無邪気に遊んでいる] 光景が目に浮かぶ。
- (6) a. [はげしく降る] 雪の中を、救助隊が出動した。
- b. [はげしく降っている] 雪の中を、救助隊が出動した。

(澤田 1997 : 32-33)

さて、この「XP型」について、先の(2b)(=(7))の例とルをテイルにした(8)を比べて見よう。

- (7) [あわただしく動きまわる] 武装した兵たちを見ると、お市はかつて信長の攻撃に備えた小谷城がこれと全く同じだったことを思いだした。
- (8) [あわただしく動きまわっている] 武装した兵たちを見ると、お

市はかつて信長の攻撃に備えた小谷城がこれと全く同じだったことを思いだした。

澤田 (1997 : 34) はこの(7)の例について、「この場面は、目の前で実際に忙しく動いている兵を見て、意識主体の「お市」が昔を思い出している場面である。すなわち「XP型」の知覚である。このような場合には、「ている」形でもかまわない」としている。しかし、これまで述べてきた本稿の考え方からすれば、(7) のル形には現場での「知覚」のままの臨場感があるのに対し、(8) のテイル形には「観察」による事態の客観的な提示が感じられるということができると思われる。

さて、ここで問題となるのは、知覚・観察をする主体は誰かということであるが、この点においてル形とテイル形の重要な違いがあると思われる。すなわち、(7) の「動きまわる」の知覚の主体は明らかに「お市」であるが、(8) の「動きまわっている」との「観察」には、語り手の声を感じられないだろうか。つまり、描写の主体としての「語り手」の存在が、ル形では感じられないのに対し、テイル形においては感じられるということが、ル形とテイル形の重要な違いであると思われるが、澤田の分析ではこのことについては触れられないままになってしまおう。

澤田の分析の更なる問題点としては、そもそも、テイル形であれ、ル形であれ、表面上の観察主体、知覚主体が登場人物として表れない場合があるということである。

まずはル形の例である。

- (9) ほかの委員たちも、机の上にかがみこんで読み耽っている。部屋には、しばらく声もない。咳払いと紙を繰る音だけだ。

(松本清張『地の骨 (上)』: 171)

- (10) 「よく見てください。その人に間違いありませんか？」

三原は、弾む息をおさえて念を押した。

(松本清張『時間の習俗』: 304)

次はテイル形の例である。

(11) だが、小田急に乗って、箱根に向っている典子の現在はあまり快活な気持ちとはいえなかった。 (松本清張『蒼い描点』: 7)

(12) 木谷は奇体なステージ・ダンスを眺めているようなふりをして、例の一団の客から眼を放さなかった。

(松本清張『告訴せず』: 157)

つまり、知覚が想定されるようなル形、テイル形の分析については、このように、知覚主体が登場人物として表れない場合についても適用可能なものでなければならないということである。澤田の分析では、このような場合、(6)の「お市」に相当する「知覚主体」ないしは「意識主体」は誰になるのだろうか。

この「知覚の主体」が誰であるのかの問題は澤田が「X'P型」の知覚としたタイプの構文にも通じる問題である。例えば先の(3a) (= (13))を見てみよう。

(13) 一瞬のことだったが、[部屋の中の有明行燈に照らされたたつの眼が、はっきりと憎悪に光っていた]のを、おしのはみってしまったのだった。おしのは倒れこむように布団に戻った。

これについては、「自分の目撃した事象P (目の光) を「おしのは」はX (知覚時点) の時点よりも後の時点X' (布団に戻った時点) に立って描写している」(澤田 1997: 28) としている。しかし、このような語りの文体

においては、語りの内容はすべて語り手によって語られるのであり、「意識主体による後になってからの報告」ということはありうるのだろうかという素朴な疑問が生じる。そもそも澤田（1997：28）は、この（13）の例について、まずもって、次のような問題提起をしている。

- (14) (21) (= (13)) において、「光っていた」と断定しているのは語り手であろうか、それとも意識主体の「おしの」であろうか。ここでは「おしの」であると想定してみよう。

筆者には、断定の主は「おしの」であるよりは、むしろ、テイルの場合のように、「語り手」であるように思えるのだが、もしそうであるとすれば、ここで求められるのは、なぜ、タ、テイルの断定の主体が語り手であるのかというその原理づけられた説明である。

このような問題、すなわち、ル形とテイル形の違い、タ形の本質といったことについて論じているものに、尾上（1987）の考察がある。尾上によれば、確定的な意味の平叙文を述べるということは、過去と未来との対比における現在ではなく、話者の立つ絶対的な現在において、ことの存在を承認することであるとしている。しかし、動作動詞そのものによる確言はことの存在を承認しえない。なぜなら、動作動詞は存在という意味を内に含んではいないからである。

一方、このような動作動詞が、「話者の立つ絶対的な現在におけることの存在」を主張するために必要な文法手段が、タやテイルであるとしている。つまり、タやテイルは動作・変化という継時的な動詞の概念を、話者の絶対的な現在におけるあり方の表現へ持ち込むための要素であると理解される。

尾上のいう「ことの存在を承認する」とは別な言い方をすれば、命題の真偽値 (truth-value) にコミットすることであるということができると

思われる。文は真偽値を持ちえてこそ完全な文たりえるが、語りのコンテキストにおいても、知覚対象となりうる命題の真偽値にコミットするのは、発話者たる語り手であると思われる。つまりタやテイルが生じた文においては、真偽値を持ちうる命題であることから、いわば、必然的な結果として、語り手がその真偽値にコミットすることになると考えられる。

よって、だれが断定の主であるかという問いについては次のような原則を設けることができると思われる。

- (15) 語りの文における、タ形、テイル形の断定の主は登場人物ではなく語り手である。

「断定する」とは、「真偽値にコミットする」ことに他ならない。先の(13)の例においても「光っていた」との断定の主が「おしの」ではなく語り手であるのは、この(15)の原則から引き出されよう。

では、タとテイルの違いは何かという問題が生じるが、これについては、反映される語りの時の違いであるということが出来る。すなわち、タでもテイルでも、語り手はその命題の真偽値にコミットしているのであるがタには語りの絶対的現在である語りの今（発話時）が反映されるのに対し、テイルに反映されているのは、語りの現場における視点（主節時視点）であるということである。

これに対し、動作動詞のル形の文は真偽値を持ちえないことからそもそも語り手がその命題の真偽値にコミットすることはありえず、よって、結果としてル形は語り手の視点、語り手の声から解放されることになるのである。では、ル形は誰の視点を表すのかということであるが、先の(7)の例では明らかに「お市」という登場人物の視点であるが、(9)や(10)のような例においては、語り手の声を感じられない「知覚者としての語り手」の視点ということになる。登場人物の視点であれ、知覚者としての語

り手の視点であれ、ル形が表すのは、知覚対象としての事態そのものということになろう。つまり、知覚主体において知覚処理がほどこされていない、知覚に映じるままの現実世界なのである。ル形にはテイル形にない臨場感が感じられるのはこのためである。つまりこの場合、ル形の事態を表す視点は、登場人物の場合であれ、知覚者としての語り手の場合であれ、単に、事態を映す媒介にすぎなくなっているということである。以下、このような、語り手の声を感じられないル形の視点を、「語り手」と区別するために、「映し手」の視点ということにする。^②

従来、テイルは、現場性という観点から、もっぱらル形と同列に扱われ、これまで本稿で述べてきたような、真偽値にコミットという観点からの、ル形との相違点とタ形との共通点についてはほとんど論じられることはなかったように思われる。よって「誰の視点が反映されているか」という観点から、ル、テイル、タの知覚のパターンを述べれば、次のような一般化が可能になると思われる。^③

(16) ル……場面依存の「映し手」の視点

テイル……基準時における現場の「語り手」の視点

タ……発話時（語り時）における「語り手」の視点

この一般化では、結果的には、異なった語彙が異なった知覚の反映を表すことになり、先の澤田の一般化に比べれば、より直感に則した自然なものになっているといえよう。当然、この分類によれば、タは単一のグループでまとめられ、澤田のように、二つに分ける必要はなくなる。

ここで、(16) の一般化を念頭に入れて次の例と解説を検討してみよう。

(17) 「何を見ているのだ？」

と、その夫は禎子に言った。夫は〔禎子の心を覗いているような〕

目つきをした。 (松本清張：『ゼロの焦点』)
ここで、「禎子の心を覗いているような目つきをした」と感じたのは語り手ではなく禎子自身であろう。すると、この知覚関係節の事象が「覗いている」という具合に「ている」形になっている理由は、禎子による「XP型」の知覚であるからだと考えられる。
(澤田 1997 : 34)

澤田は、「覗いているような目つきをした」と感じたのは禎子であるとしているが、本稿の観点からすれば、先の(16)の原則により、「覗いテイル」の描写の主体は語り手ということになる。

次の(18)も同じく「のぞく」が用いられている例である。

(18) 「お姉さま、お痩せになったわ」

伶子は、昌子の顔をのぞくようにして言った。それが昌子の生活をのぞいているような感じだった。(松本清張『山峡の章』: 37)

ここでは、「のぞく」のル形と「のぞいている」のテイル形では使い分けがされているといえる。つまり、「顔をのぞく」という動作は、いわばはっきり知覚で捉えることのできるものであるが、「生活をのぞく」については、知覚としてよりは、語り手の解釈が加わった観察として捉えるほうが自然であり、よって、テイル形が用いられていると思われる。その意味では、澤田が問題にした(17)の「心を覗いている」についても、ル形ではなくテイル形が用いられているのは、「心を覗く」という事柄が、単なる「映し手」としての知覚としてよりは、「語り手」の主観的解釈が感じられる観察として捉えるほうが自然なためではないだろうか。ル形とテイル形の区別をしない澤田の分析では、このような微妙な使い分けは説明できないことになろう。

最後に次の例を見てみることにしよう。

- (19) 講義が終って教授室に引揚げるとき、偶然に有田専務理事の大きな身体を見かけた。……有田専務理事は、河上事務局長と話合いながら正面の廊下をよぎった。距離があったので、向うでは川西が歩いているのに気がつかない。 (『地の骨(上)』: 242-243)

この例で問題なのは、「川西が歩いている」との断定が誰によるものかということである。「気がつかない」の主語である「有田専務理事」でないことはもちろんであるが、また「川西」と客体視できる立場にいないければならないことから「川西」でもありえず、いずれにせよ、「有田」も「川西」も「気がつく」の意識主体でないことは確かである。結局、このXP型も、意識主体は本稿でいう語り手ということになる。しかし、もし、この引用例が、「距離がなかったので、向うでは川西が歩いているのに気がついた。」という文であれば、澤田の分析では、「歩いている」との知覚は意識主体たる「有田」の知覚を表すXPの知覚ということになるろう。しかし「気がつかない」「気がついた」にかかわらず、「川西が歩いている」との描写の視点はあくまで同一の視点による分析のほうが、直感に則した分析であると思われる。本稿では、肯定、否定にかかわらず、テイルは「基準時における現場の語り手の視点」を表すとすることができ、(19)のような例は、結果的に本稿の分析を支持する例になると思われる。

3. これまでは、いわゆる知覚補文におけるル、テイルを考察してきたが、物語文における文末のルとテイルについては、いわゆる歴史的現在の用法として知られてきた。しかし、結論を先取りすれば、これら文末のル形、テイル形についても、知覚や観察が想定されるのが補文ではなく主文になっているだけで、知覚補文におけるル、テイルについての考察は、そのまま

文末の歴史的現在の用法にもあてはまるとするのが本稿の立場である。

しかし、この歴史的現在用法におけるこれまでの関心は、曾我（1984）に代表されるようにもっぱらルとタの交替にあり、先の知覚補文におけるように、ルとテイルは同じくル形として扱われ、ルとテイルの用法の違いについて論じられた考察は、これまでほとんどなかったといつてよいように思われる。⁽⁴⁾ 本稿の観点からすれば、歴史的現在用法においても、これまで論じてきたように、ルとテイルには、「知覚」と「観察」の使い分けがされていると思えるのであるが、曾我を検討しながらそのことを見ていくことにする。

まず、物語文におけるルとタの交替の研究についての曾我（1984：124）の結論は次のようなものである。

- (20) a. 主筋的事象は「た」で、副次的事象は「る」で述べられる傾向がある。
b. 過去の事象を目前の事象とするため主筋的事象にも「る」が使われ得る。

まず、(20a) については、次のような例から引き出している。

- (21) かま場から出て来た喜三右衛門は、えん先にこしを下してつかれた体を休めた。日はもう西の山にはいろうとしている。ふと見上げると、庭の柿の木には、すずなりに生った実が夕日をあびて、赤くかがやいている。喜三右衛門は余りの美しさにうっとりと見とれていたが、やがて「ああきれいだ。あの色をどうかして出したいものだ。」と独り言を言いながら、またかま場の方へ引き返した。いつも自然の色にあこがれていた彼は、目の覚めるような柿の色の美しさを見て、もういても立ってもいられなくなったの

である。

喜三右衛門は、その日から赤色の焼き付けに熱中した。

(長沼直兄『改定標準日本語読本』)

確かに、この例においては、「休めた」「見とれていた」「引き返した」「熱中した」の「タ」が主筋的事象、「している」「かがやいている」「のである」の「ル」が副次的事象を表していると思われる。この曾我の説は、松村(1996:29)でも踏襲され、次のように述べられている。

- (22) 現在形が用いられている「西の山にはいろいろとしている」「赤くかがやいている」は、明らかに喜三右衛門の目に映じた背景を「内から」描写したものであり、物語の筋からすると副次的事象となる。一方、過去形の「引き返した」「熱中した」は、筆者が物語全体の筋からみて必要と考え「外から」登場人物の行為を記述したものであり、その意味で主筋的事象・主な出来事であると言える。

さらに松村(1996:25)は、日本語の歴史的現在とは、「語り手はその語り中の登場人物(語りの中に描かれる語り手自身を含む)に同化して、その人物の知覚認識を通して「内から」出来事を描写している」とも述べている。この記述は一見もっともらしいようにも思えるが、「語り中の登場人物に同化して」という記述については、すべての歴史的現在の用法にこのことがあてはまるというわけではないことをいっておく必要があると思われる。というのは、§2の知覚補文において論じたように、そもそも登場人物が現れず、「語り中の登場人物に同化する」ことが不可能な、次のような場合もあるからである。

- (23) 日が短くなった。五時半というのに空が真暗になっている。新宿のコマ劇場付近の飲み屋街は、どの店にも灯が輝いて、気分がでていた。この時刻だと会社の帰りと合うから、狭い路地は勤人らしい群れでざわめいている。 (『地の骨 (上)』: 229)

しかし、(21) と (23) のテイルはそれぞれ同じテイルの用法というべきであり、先に述べたように「語りの現場における、基準時における語り手の視点」という一般化で捉えるべきであると思われる。すなわち、(23) はいうまでもなく、(21) においても、テイルは、「登場人物の内からの描写」ではなく、現場での語り手の声とすべきである。

曾我では (21) の例の他に、『潮騒』『山の音』『三四郎』『倫敦塔』の四つの資料があげられているが、『倫敦塔』の例を除いて、曾我がル形といている例は、『山の音』での「聞える」を除き、すべてテイル形の例（「のである」のような表現を除く）であり、本稿でのル形の例はない。すなわち、「ル形は副次的事象を表す」といった場合のル形はすべてテイル形を念頭に置いた一般化であり、正確には「テイル形は副次的事象を表す」というべきであろう。確かに、テイル形は、継続的、状态的、未完了であって、テイル形で述べられる事象は、(21) のように副次的であるということはいえるように思われる。

一方、曾我が (20b) のような結論も付け加えたのは、次のような全編がほぼ、ル形で書かれている『倫敦塔』のような例があったためである。

- (24) 始は両方の眼が霞んで物が見えなくなる。やがて暗い中の一点にパッと火が点ぜられる。その火がしだいしだいに大きくなって内に人が動いているような心持ちがする。次にそれがだんだん明るくなってちょうど双眼鏡の度を合わせるように判然と眼に映じて来る。次にその景色がだんだん大きくなって遠方から近づいて来

る。気がついてみると真中に若い女が座っている、右の端には男が立っているようだ。両方ともどこかで見たようだと考えるうち、瞬たく間にズッと近づいて余から五六間先で果と停る。

もちろん、このルは、これまで本稿で論じてきた「映し手」の視点で描かれたルである。

ここで、他のル形の用例もいくつか見てみることにしよう。まずは、ル形の知覚が登場人物によるものであり、松村のいう「登場人物の内からの描写」があてはまる場合である。

- (25) 途中で、寒そうな湖が見えた。次の駅で窓から覗くと、湖水から獲れた魚を籠に入れて、汽車に乗りこむ人があった。

見覚えのある羽咋の駅を過ぎると千路、金丸、能登部と、小さな駅に次々と停まる。この辺まで来ると、片側に大きく山が迫りはじめる。見知らぬ小さな駅を過ぎるのが、何がなし悲哀があった。
(『ゼロの焦点』: 370)

- (26) このとき、後ろから唳々と馬蹄の音を聞いた。ふり返ると、白馬にまたがった黒の山高帽に乗馬服の騎乗者二人が速歩で近づいてきていた。……

馬は眼の前にくる。……

「メルシイ、ムッシュ」

と会釈した声は若い女だった。……

こちらは声を呑んでいると、女性騎乗者は白い馬を速歩のまま湖水の中に乗り入れて行く。白い飛沫を上げ、湖面に輪がひろがる。葦の群れからはずっと離れたが、さりとて湖心に向かうのでもない。岸に沿って即かずはなれずに進む。あながいに浅瀬で、馬の膝の下ぐらいまでしか水に浸してない。その姿は霧に消えた。

(松本清張『詩城の旅びと』: 202-203)

次は、ル形の知覚に登場人物が関与していない場合であり、「登場人物の内からの描写」があてはまらない例である。

- (27) 大通りを「館山寺温泉行」のバスが走り抜けて行く。アーケードの下を歩く髭男は煙草屋の前で足をとめる。この男なら、四日前に藤沢の西田栄三に「橋本」と名乗った人物であった。

(松本清張『十万分の一の偶然』: 77)

- (28) 暗いアパートの部屋に入って灯をつけた。がらんとした倉庫のような空気である。壁を塞ぐ書棚も、机の上に積んだ書籍もノートも、廃品のように生命がなかった。寒いからなおさらだ。稲木は電気ストーブをつけ、狭い台所でガスレンジに火を点じる。コーヒーポットに茶色の粉を入れ、水を注ぐ。底に飲み滓のこびりついたコーヒー茶碗を一個だけ洗う。茶碗の音と水の音とが寝静まった夜中に響いて侘しい限りであった。 (『地の骨(上)』: 59)

- (29) 「あなたは、何でも、今年の正月、京都でかなりな大金を盗難に遭われたそうですね？」

「……」

川西は、不意をくらって椅子からすべりそうになった。顔から血がひくのが分る。急に耳鳴りがしてきた。あたりが静かなだけにジーンと鼓膜の奥にひびく。 (『地の骨(下)』: 395)

明らかに、これら文末がル形で終わる例は、文末のテイル形にはない雰囲気を持ち合わせている。一言でいえば、工藤(1995: 202)のいう、anti-narrativeなルポルタージュ的な手法が持つ語り手不在の印象である。もちろんこの語り手不在は、§2で論じたように、進行する事態そのもの

を、知覚するままに提示する、「映し手」の視点で描写されるためであるが、更に、これらル形が、§2のような従属節ではなく主節にあるために、知覚の媒体が表面には表れず、よりいっそうの躍動感や眼前描写性が感じられるようになるといえよう。

もっとも、歴史的現在とは劇的現在ともいわれるが、これらル形がすべて、劇的な場面を表しているわけではないことは明らかである。中には、(26)の例文のように、一見、劇的な場面を表していると考えられる例もあるが、(28)の「火を点じる」「水を注ぐ」「一個だけ洗う」といったことは、およそ、劇的とはかけ離れた動作といえよう。ただ、これらのル形が用いられるコンテキストについていえることは、(28)のように動作が連続する場合に用いられることが多いといえるが、これは、現場の事態の進展ゆえに、語り手が、語りの立場を忘れて現場の場面に没入してしまい、ひたすら、「映し手」として、知覚するままに、事態の進行を語るためである。これらの例において、ルをタにすると、タによって語り手の存在が明示されるため、現場の躍動感はなくなってしまう。これらの用法は、語りの時が表れないト書きの用法にも通じるものである。事実、(27)のル形はト書きの用法といってもさしつかえないものである。

さて、これらの知覚を表すル形においては確かに、物語の事態は進展することになり、曾我のいうように、主筋的事象を表しているようにも思える。とはいえ、このようなル形の主筋的事象とタ形による主筋的事象を同一のものとしてよいかどうかは疑問であると思われる。というのは、タ形においては、語り手の意図が反映されているのに対し、「映し手」の視点のル形には、ル形の意図的な使用というよりは、語り手が現場の場面に没入するあまりの、いわば、無意識的な使用と考えられるからである。このような文末での語り手不在の「映し手」のル形の使用は、補文でのル形とは異なって、「〈かたり〉というテキスト性を破壊してしまう」(工藤 1995: 202) 恐れもあり、その使用にはある種の制限が予想されるが、事

態の進展する場面での使用は、このようなル形の出現の制約にそった用法といえる。それゆえ、ル形による事態の進展は、タ形による主筋の明示とはかなり性質の異なるものであり、この用法については、事態の進行する背景の臨場感を高める副次的、背景的事象を表すという解釈も可能かもしれない。先の『倫敦塔』の、ル形のかもしだす現実か夢か区別がつかない奇妙な雰囲気は、語りの主体が明示されないことから生じるものであるといえよう。

また、もしルが主筋を表せるとすると、テイルには主筋的事象を表す場合が全くないのかという問題も生じると思われるが、次の例は、テイルで描かれている箇所に焦点があり、主筋的事象であるとも考えられる。

(30) どこかに隙間があるらしい。はてなと思って首をもたげ、足もとのほうへ眼をやった。次の控えの間との襖が半分あいている。

昨夜、この襖はしめたはずだったが、と思った。錯覚だったかと思い、とにかく、そこから寒い空気が入るので蒲団から起き上がった。閉めるつもりで歩み寄ると、次の間の廊下に面した襖が完全に一枚ぶんあけっ放しになっている。

川西は愕然となった。……川西のうろたえた眼は洋服ダンスに走った。扉は完全に閉ってなく、三センチばかり開いていた。

彼は扉に飛びついた。……

洋服が無かった。ハンガーだけはぶらりと下がっている。

(『地の骨(下)』: 173-174)

そうすると、テイルも主筋を表しうるという事になり、このことをまとめると、「タは主筋的事象を表すが、ル、テイルも主筋的事象を表しうる」ということになってしまうが、このような一般化は有意義なものとも思えない。そもそも、主筋と副筋の区別は、はっきり二分化できるものとも思

えず、むしろ、牧野（1996：116）のいうように、出来事を前景とみるか後景とみるかは、個人差があるものとみるべきかもしれない。

さて、ここで、曾我の（20）にもどると、これまで述べてきたような問題点はあるものの、その一方で、この一般化がある程度まであてはまることもまた事実であると思われる。しかし、このような述べ方においては、次のようにルとテイルのはっきりした区別が必要になろう。

- (31) a. 主筋的事象は「タ」で、副次的事象は「テイル」で述べられる傾向がある。
b. 過去の事象を目前の事象とするため主筋的事象にも「ル」が使われ得る。

とはいえ、この場合、「タ」の主筋的事象と「過去の事象を目前の事象」とするための「ル」の主筋的事象は、それぞれ、「語り手」と「映し手」によって述べられた異質なものであるとの但し書きが必要となろう。また、過去の事象を anti-narrative に眼前の事象として述べるのが、真の意味での歴史的現在用法であるとすれば、この用法は、「映し手」としてのル形の用法についてののみいわれるべきであると思われる。

ここで、澤田（2000：122-123）が問題にしている次のルとテイルの違いについて検討してみよう。

- (32) 長英は星空を見あげた。ついてきた囚人たちは、堀のかたわらに身を寄せ合っている。遠くで夜番の打つ拍子木の音がきこえていた。
(吉村昭『長英逃亡』)

澤田は、この例文で「きこえていた」の箇所において、「聞こえる」と「聞こえている」になった場合の違いを次のように論じている。

- (33) a. 遠くで夜番の打つ拍子木の音が聞こえる。
b. 遠くで夜番の打つ拍子木の音が聞こえている。

「聞こえる」の場合、その時に、ある一定時間、音が持続的にしているという点では「聞こえている」と共通しているが、意識主体がその音を知覚する仕方はより主観的、内面的である。すなわち、意識主体の内的描写となっている。

本稿の観点からは、「聞こえている」は語り手の声であるが、「聞こえる」は、主人公である長英の知覚を表していると説明できる。澤田のいう、「意識主体の内的描写」とは、「語り手ではなく、知覚主体である主人公の知覚」と理解されよう。結局、澤田（1997）では、ルとテイルの区別はされていないが、澤田（2000）では、この違いが認められたことになる。

また、松村（1993：416）は、曾我のいう「主筋的事象は「タ」で述べられる傾向がある」ということについて、「タ形が重要な出来事を描写するのに使われるのは、聞き手が過去であることを読み込めるにも拘らず、わざわざその出来事が過去に起こったことを繰り返すことで、それだけその出来事に重要性を込める効果をあげているのである」としている。しかし、タが重要な出来事を描写するのに用いられるとすれば、それは、過去の出来事の繰り返しをするためではなく、重要であるとの認識がはっきり語り手によって明示されねばならないためである。また、タとルの交替についても、「日本語において歴史的現在、文脈より過去指示が明らかな場合にタ形の繰り返しを避ける手段となっている」（松村1993：416）としているが、この見方にも問題があるといわざるをえない。ル形は、語り手が語りの立場を忘れて、進展する事態にのめり込んでいる語り手の心的状況を表しており、そのためタ形での「語りの今」が反映されないのであるが、このような心的態度は、単にタ形の繰り返しを避ける手段とはみなせないのである。

4. 英語における歴史的現在とは、もっぱら、話し言葉が中心であり、書き言葉で歴史的現在が用いられることはきわめてまれとされる。これは、時間をかけて書かれる小説などでは、固定視点が維持されるためと思われる。一方、話し言葉では、歴史的現在用法が比較的によく見られ、この分野の文献としてよく引き合いにだされる、Wolfson (1979), Schiffrin (1981) も会話体の歴史的現在を扱ったものである。よって、日本語の歴史的現在用法と英語の歴史的現在用法は、それが表れる資料においては多少なりとも違いがあり、全く同列には扱えない面があることも確かであるといえる。

さて、歴史的現在用法とは、過去の出来事を発話時の眼前で生じているかのように生き生きと描く用法であるということについては、ほぼ一致した見解であると思われるが、ではなぜ、歴史的現在時制の用法が過去の出来事を眼前の動作であるかのように叙述できるのかということについては、ただ過去の出来事を現在時制で表すからという暗黙の説明だけでそれ以上の考察はなかったように思われる。しかし、この説明だけでは不十分なことは明らかである。なぜなら、現在時制がすべて眼前の動作を表すとは限らず、また、英語においては、眼前の進行中の動作を表すには進行形を用いるのが普通であるからである。それ故、歴史的現在用法の本質を明らかにするには、まずもって、なぜ、歴史的現在用法が、過去の出来事を眼前で生じているかのように表しうるのかということが明らかにされねばならない。

このことの本質を理解する上で参考になると思えるのは、眼前の動作を表すのに動作動詞の単純現在時制が用いられる次のようなスポーツの実況中継の用法である。

- (34) Napier *passes* the ball to Attwater, who *heads* it straight into the goal! (Leech 1987 : 6)

しかし、すべてのスポーツの実況が単純現在時制で表されるわけではなく、次のような進行形が用いられる場合もある。

(35) Oxford *are rowing* well.

(Leech 1987 : 19)

では、(34) におけるような、眼前の動作を表すのに進行形ではなく単純形が用いられる場合とはどのような状況であるのかということになるが、一言でいえば、眼前でスピーディーな動作が連続して続く場合ということになると思われる。つまり、目前に進行する動作があまりに急であるため、知覚主体が知覚対象の情報処理をする間もなく、知覚したままをそのまま述べる場合である。ではなぜこの時に、進行形ではなく単純形が用いられるのかということについてであるが、知覚のままに表すということは、知覚主体の知覚対象に対する心理的な関与を含み得ない形式で表すということであり、知覚対象となる命題の真偽値へのコミットといった心理的関与が表されている過去形や進行形はふさわしくないということになる。

原理的にはこれと同じ事が、歴史的現在用法の単純形にもあてはまると考えられる。つまり、この用法は、話し手が、進行する事態を追うのに没入するあまり、語られる対象の命題の真偽値にコミットする間もなく、知覚するままに描き、結果的に発話時の話し手の今の立場が反映されなくなる現象であると考えられる。⁶⁾ またこの場合における心的態度は、ある程度持続するため、過去形であれ、現在形であり、同じテンスは群がって続く傾向があるということになる。よって、より正確には、ここでの単純形は現在時を表すというよりは無時制を表すというべきであり、過去に生じたとの意味合いはコンテキストから与えられると考えられる。つまり、この用法は主体が明示される「語り手 (話し手)」によって語られたのではなく、主体が現れない「映し手」によって映された、知覚された現実世界そのままを描き出す用法なのである。よって、結果的に、日本語のル形

の場合におけるように、「語り手によって「物語られる」わけではないので描写の直接性の印象が生まれ」⁶⁾てくるのである。これが生き生きした描写、臨場感が生じる所以と考えられる。

さて、歴史的現在を語り方を‘vivid’, ‘animated’, ‘dramatic’にするというこれまでの伝統的な見方に異議を唱えたのが Wolfson (1979) である。彼女は、このような伝統的な見方では、英語でも重要な事実は、過去形で述べられるという事実を説明できないと疑問を投げかけた。

例えば、彼女があげた次の(36)の例を見てみることにしよう。これは、一家で湖に遊びに行ったことを妻が回想して述べた場面である。

- (36) Oh, yes, we decided to go to this pizza place for lunch so we sailed — we left at eleven in the morning and we got there at three, okay? Four miles — it was against the wind all the way. We *get* up to the place, we *have* our lunch, we *get* back in the boat, and I said to Bud, ‘I think the wind died.’ The wind died, it took us hours to get back. And we were shipping water because we had a hole in the boat.... No wind. Absolutely dead.... And Bud finally took the daggerboard out and was using it as a paddle. (Wolfson 1979 : 173)

この箇所について、彼女は次のようにコメントしている。

- (37) In this story the most dramatic point is in the past (*I said to Bud, ‘I think the wind died.’*) The portion of the story which is in CHP (the Conversational Historical Present) (*We get up to the place, we have our lunch, we get back in the boat...*) does not describe action of any particular dramatic import.

(Wolfson 1979 : 173)

確かに、この話しの中で歴史的現在で述べられている箇所は大事な箇所であるとは思えず、(37) の見解は正しいように思われるが、その一方で、従来の歴史的現在についての考え方がすべて間違っているとは思えず、Wolfson の見解と伝統的な見解をどのように整合すべきかという問題が生じることになる。

一方、Schiffrin (1981 : 51) には、歴史的現在は、時間に添っての事態の進行を述べる箇所において用いられるが、冒頭で話しの概要について述べる部分、話し手の評価を述べる部分、結末の部分などではほとんど生じないといった観察があるが、この観察は、(37) の Wolfson (1979) の観察と重なり合うものと考えられる。つまり Wolfson のいう過去形が用いられるコンテキストとは、Schiffrin のいう話し手の評価を述べる部分、結末の部分と解釈することが可能である。すなわち、Wolfson のいう重要な出来事とは、話し手が重要であるとの判断を下した箇所と考えられ、彼等の観察は、結局のところ、話し手（語り手）の立場が反映される箇所においては、英語では過去形が用いられねばならないということであり、これは同じ場合において、日本語ではタ形が用いられるということと平行していよう。結局、Wolfson は、‘dramatic’, ‘lively’, ‘animated’ の意味と ‘important’ の意味を混同しているように思われる。(37) での ‘dramatic import’ という語の使用はそのことを示してはいないだろうか。要するに、歴史的現在用法の本質は、あくまで、連続した動作を知覚として提示することにあるのであって、その対象が、‘dramatic’ であったり、‘important’ である場合もありえようが、別にそうである必要は全くないのである。

例えば、次の二つの例を見てみよう。

(38) Suddenly the door *swings* open and a man rushes into the room. He *snatches* Maud's handbag from her hands and *disappears* through the French window. We were so flabbergasted that he was gone before any one of us reacted.

(R. Declerck 1991 : 89)

(39) "Do you mean," I said, "that you didn't even notice? That since seven o'clock you haven't notice a thing?" "I didn't notice anything, no. I *sit* in the sitting-room, and about eight o'clock I *start* a headache, so I *go* into the kitchen and *have* a whisky, then I *feel* worse, so I *have* another or two, and then I *go* to bed." (M. Drabble, *The Garrick Year*) (塚本1990 : 93)

(38) は、多少なりとも、劇的な場面といえるかもしれないが、(39) は先の (36) のように少しも劇的ではなく、むしろ平凡な事柄の強調ともいえる。しかし、これらの用法に共通しているのは、事態を事態として、主観を入れずに客観的に述べるというスタイルである。

語り手が、語り手の立場を表さず、事態を知覚するままに描くスタイルは、次のような例では効果的に表れている。

(40) In the vineyard the water *rises* to the workers' knees, then their waists, then their necks. He *tries* to yell at the people he *loves*, telling them they must do something now, quickly, in the next few seconds, or they will die, but though he *opens* his mouth and *strains* his throat, no sounds will come out. Sheer terror *possesses* him. The water *laps* into his open mouth and *begins* to choke him. This is when he *wakes* up.

(K. Follett, *The Hammer of Eden* : 4)

(40) は、冒頭の書きだしがすべて単純現在時制で描かれている小説の一部であるが、この書きだしの最後で夢であることが明かされる。この奇妙な雰囲気は、現場の事態を知覚として提示する単純現在時制の性質をうまく利用したものといえるが、この用法は、先に述べた、やはり同じような想像の世界を描いた『倫敦塔』のル形の例に共通するものである。

さて、これまで、単純形の歴史的現在用法を論じてきたが、先に述べた(34)のような進行形でのスポーツの実況に相当するものとして、進行形が用いられた歴史的現在用法がある。この進行形の歴史的現在用法については、Schiffrin (1981 : 57) は、“the co-occurrence of the HP (Historical Present) with the progressive is a way of making a past event sound as if it were occurring at the moment of speaking – a way of making it more vivid.” と述べている。確かに、次のような例においては、進行形の使用が「自分の寝室にいた男が自分の夫でないことが分かった時の恐怖」を劇的に描いていると思われる。

- (41) z. So I felt him lean over the bed.
 aa. And I- I start laughin'.
 bb. I says,
 'Oh you s-' excuse the expression
 cc. I said,
 'Oh you son of a bitch,' right,
 dd. And he came,
 ee. he kissed me.
 When he kissed me
 ff. I felt his beard.
 gg. And I'm pushin'
 hh. I'm sayin'

'Ooh, my God! It isn't you!'

ii. And I'm *pushin'* with all my might, right?

jj. I'm *saying*,

'Oh my God! Who is he?' y'know.

kk. And I PUSH.

ll. And I'm-uh-uh I try to scream

mm. and I was too scared. (Schiffrin 1981 : 59)

この例においては、先の (56) の日本語のテイルが効果をあげている例と共通したものが感じられるかもしれない。

しかし、進行形に強調の意味合いが感じられるとすれば、それは、観察の主体としての話し手の意図的な使用から生じるのであり、事態そのものを客観的な事実として提示する単純形の用法とは異質なものであるとすべきであろう。よって、英語においても真の意味の歴史的現在用法を、「映し手」としての anti-narrative な手法にあるとするならば、あくまで、日本語のル形の場合と同様、単純形の場合のみをいうべきであるように思われる。

—注—

- (1) このル形の本質、そしてテイル形との違いについては、これまで、はっきりしないままであったように思われる。たとえば、金田一「国語動詞の一分類」(1950, 1976 : 13) には、次のような記述がある。(この指摘は中畠 (1995) による。)

連体形の用法は終止形の用法に似ているが、全く同じではない。即ち、終止形においては、現在の状態を表わし得るのは状態動詞だけであった。然し連体形においては継続動詞もまた現在の状態を表わし得るようである。「庭に鶯の鳴く声が聞える」「畠を打つ農夫の姿が見られる」など、「鳴いている声が聞こえる」「畠を打っている農夫の—」の意で、「鳴く」「打つ」

は現在の状態を表わしていると見られる。尤もこの言葉遣いは文章語めいた響をもつ。

しかし、ル形とテイル形には、知覚としてか、あるいは基準時が明示された観察として述べているのかといった違いがあり、「畠を打つ農夫の姿が見られる」と「畠を打っている農夫の姿が見られる」の意味は、全く同一ではない。

- (2) 「映し手」という名称は甲田 (1998) による。甲田 (1998 : 23) には、Stanzel K. Franz (1979) *Theorie des Erzählens*. Verlag Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen. (Charlotte Goedsche (tr.) *A Theory of Narrative* 1984 Cambridge University Press) の説の紹介として以下のような記述がある。

……このうち、物語の内容を再現し伝達する様態である叙法について、伝達遂行者の種類として「語り手」と「映し手」を挙げている。映し手は、考えたり、感じたり、知覚したりするが、語り手のように読者に向かって語りかけない作中人物で、この場合読者は、映し手たるその作中人物の眼を通して物語の他の人物たちを眺める。語り手によって「物語られる」わけではないので、描写の直接性の印象が生まれ、この錯覚が語りの媒介性を覆い隠している。一方「語り手」は、物語世界の外に位置して作中人物や出来事を外界の視点（例えば全知の視点）から描写し、必要に応じて解説・注釈などを差し挟むものである。このような語りの媒介性の形成において〔演劇～物語〕を対比させている。

語り手の声が聞こえるタ、テイルは、語り手での情報処理がなされているのに対して、「映し手」によって捉えられるル形においては、映し手による知覚処理はなされず、事態そのものだけを伝えているということになる。

- (3) 岩崎 (1995) の「従属節のテンスと視点」で提案された「主節時主語視点」の問題点についてはすでに尾野 (1999) で述べたが本稿との関連において、一つだけ述べておきたい。岩崎の「主節時主語視点」の根拠の一つは次の a と b の表す事態はほとんど変わらないとするところにあった。

a. 土地の新聞記者が取り巻いているので今西は何だろうと思って、その一行に目を据えた。

b. 土地の新聞記者が取り巻いているのを見て、今西は何だろうと思って、その一行に目を据えた。 (岩崎 1995 : 74)

つまり、a のノデ節の視点は、主節主語の「今西」の視点働いているとした。しかし、b のテイルの視点ですら、これは「今西」の視点ではなく、本稿で論じたように現場の語り手の視点である。もっとも、次の c のようなル形になれば、「主節時主語視点」となり得よう。

c. 土地の新聞記者が取り巻くのを見て、今西は何だろうと思って、その一行に目を据えた。

また、本稿で論じられているル形の性質は「……ルと……」といった他のル形の構文にも適用可能と思われる。

池上(1989:263)は、『雪国』の冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」の文には、〈語り手〉の声と〈主人公〉の声と〈読者〉の声が重なりあっているとの指摘があるが、〈読者〉の声はともかくとして、〈語り手〉の声はタがかもしだすのに対し、〈主人公〉の声は、明らかに〈映し手〉としてのル形がかもしだすものである。このルを「国境の長いトンネルを抜けタラ雪国であった」とタラにかえてしまうと、発話時の〈語り手〉の声しか聞こえてこず、〈主人公〉の声は消えてしまおう。

(4) 工藤(1995:199-200)の次のような記述においては、テイルとルの区別はされていないとみるべきだろう。

実際、シテイル形式は、次のように、作中人物の知覚体験性を明示する場合に、多く使用されている。

・岩田は玄関を出た。ふと気がつくと、西の山かげにもう陽が落ちかかっている。東のボタ山のとっぺんが黄色く染まっている。岩田は表通りに出ると、歩きながら考えた。(死の流域)

作中人物の知覚性を明示するために、スル形式が使用される場合もある。

・伸子はそばで見ていて、そのとき、良人がしんからあわれになった。津山に命じられる通り、彼は真心こめ、眉をあげ、大きい息を吸う。気をつけて小さく息をする。彼がこんなに真剣で全心的なのを、どんな場合にも見たことがなかった。(伸子)

もっとも、ル形とテイル形の違いについて触れられたことが、これまで全くなかったということではない。例えば、田中(1976:429-430)には次の記述がある。

①運動場の鉄ぼうで、六年生のおねえさんが前回りのれんしゅうをしている。②ぴょんと鉄ぼうにとびついた。③ひざをまげてくると回る。④かみの毛がはね上がる。⑤三回めになると、顔がまっかになった。⑥それでも、まだ回っている。⑦回り方がだんだんおそくなってきた。⑧とびおけると、うれしそうに、にっこりわらった。

右の例(上の例)で③の文末は「回る」であり、⑥の文末は「回っている」である。両者の違いはどこにあるのだろうか。「回る」のような継続動詞の終止現在形は、普通の場合、未来をあらわすことが知られている。しかしこの場合、前後の文脈から「回る」が未来の事象をあらわしているとは

考えられない。従来は③も⑥も区別なく「歴史的現在」と呼び、「現在形の文体論的用法」とみなして来た。従って両者の相違について分析されることがなかった。本稿では⑥については観念時用法の現在形とみなし、話し手が観念上の一時点、この場合は六年生のおねえさんが鉄棒をしているその現場に立って、その時、現に「回る」という動作がおこなわれているということを「ている」を附した語形で表現していると解釈する。それに対して③は「回る」という動作そのものを具体的な時と関係づけずに表現する超時的用法であると考え。

しかし、テイル形を「観念時用法」とするのはともかくとして、ル形を「超時的用法」と命名することには、異論もでてこよう。なぜなら、このル形は実際、現実世界で生じた事柄であるからである(糸井1982:54)。結局、これらのルとテイルは本稿でいうところの、「知覚の表出」と「事実確認的な観察」という観点から説明できよう。

- (5) 葛西(1998:183)においても英語の歴史的現在用法について触れられている箇所があり、次のように述べられている。

いま仮に無意識ないし非意図的にする話し手の表現を「流露」とし、意図的な表現を「表出」(原文では「流出」となっているがこれは誤植であろう)として区別するならば、「ここ」的、「今」的な自己中心的性格の「心的現在」は「流露」に属するものである。これに対し、「歴史的現在」、「劇的現在」は「表出」にふさわしいといえよう。

すなわち、話し手における過去から現在(また再び過去)への時制の移動は話し手の視点の移動、心的態度の一貫性の欠如を示してはいるが、これは実は、その時、話し手が心的態度の一貫性を失うほど「強い感情」に動かされていたということでもある。それが、「ここ」的、「今」的に表現されるので、そこに大きな臨場感がうまれるのであろう。

このような葛西の見解には、いくつか問題点があるように思われる。まずは、ネーミングについての誤解と思われるが、普通一般に論じられる、いわゆる歴史的現在用法は、本稿で論じたのも含め((24)の『倫敦塔』のル形と(40)の*The Hammer of Eden*の現在形を除く)、すべて、話し手の無意識的な使用であり、その意味では、「歴史的現在」は、葛西のいう「表出」ではなく、「流露」ということになる。

また、歴史的現在用法が、臨場感を生み出すのは、「ここ」的、「今」的に表現されるためというよりは、単純現在形が、「映し手」の「知覚」として捉えた事態そのものを表すためとすべきである。また、葛西のいう「強い感情」は、事態を事態として客観的に述べる「映し手」の視点とは、相容れないのではな

いだろうか。

さて、本稿や葛西などにおける英語の歴史的現在 (Historical Present, 以下 HP と略す) に対するアプローチは、基本的には、語りの現在から「語られる世界」への「視点の移動」を前提にしている。しかし、その一方で、歴史的現在を、「視点の移動」とはみなさない一連の樋口の研究 (1995a, 1995b, 1998) がある。

樋口は、単純現在時制は現在についての状態しか表さないとする前提に立ち、HP は「動きを直接言葉にしたものではなく、一旦時間を捨象し固定したものを、再度時間の流れの上で、今度は動かない状態的なものとして捉え直したもの」であり、「ある動きをそれを象徴する写真で捉えた様なもの」「動きを描いてはいるが、写真自体は動かない。動かない schematic な状態とみるからこそ、刻々移りゆく現在の一瞬一瞬でも全体図を捉えることが出来、現在形で表しうる」としている (樋口 1995a)。それゆえ、樋口は HP は vivid でも dramatic なものでもありえないとして、次のように述べている。“HP may be vivid since it may incorporate actions, but it can also be less dynamic, since the image is abstract and static (Higuchi 1998 : 84).”

しかし、このような HP の本質を動的でなく、静的なものともみなす分析は直感に反する不自然な分析である。まず、問題となるのは、スポーツの実況中継における HP であるが、これについて Higuchi は、この HP でアナウンサーが伝えているのは、目前に進行している動作ではなく、予想されたシナリオという schema をいっているのであるとしている。Higuchi はこの根拠の一つとして、実況の最中に予想されない事態が生じた場合は、HP が用いられている次の a ではなく、過去時制の b が使われるとする Langacker の例を引用している (Higuchi 1998 : 79)。

a. #The scoreboard explodes!

b. The scoreboard exploded!

この場合においては、確かに、過去時制が用いられると思われるが、それは、“explode” という事態が予想できなかったためではなく、一連の知覚される事象としては捉えられないからと考えるほうが自然であろう。つまり、このような事態は知覚ではなく、話し手の今が表れる認識として捉えられ、そのため過去時制が用いられたと考えられる。

また、写真の説明に現在時制が用いられるのは、写真の静的な imperfective image のためであるとしているが (Higuchi 1998 : 73-74)、これも本稿の観点からは、いわば写真の現場に視点を移行し、「映し手」が写真にある現場を「知覚」して事態を語らせる手法によるものと説明されよう。

更に、Wolfson があげている会話的歴史的現在についても、語られるのは過去の schematic image であるとして、次のように述べている。“HP describes the schematic image of the past that exists at the present moment conceptualized as immediate reality, sacrificing its dynamism. (Higuchi 1998 : 85)”

確かに英語の会話的歴史的現在には、このような考えが成り立つ場合があるかもしれないが、日本語の物語での歴史的現在用法においては、描かれる対象がすでに、schematic image として存在しているとは考えにくいと思われる。また、このような考え方は、日英語を問わず、知覚補文には適用されず、主節と補文における、単純形やル形の共通点を捉えられなくなってしまうという重大な問題が生じてこよう。というのは、知覚補文の表す事柄は知覚の現場でまさに進行している事態としか考えようがないからである。

結局、樋口の問題点は、現在時制は現在状态的に存在するものを表すとしたところにある。つまり、HP の現在時制の文と A beaver builds dams. のような総称文や John takes a shower everyday. のような習慣を表す文を同列の文とみなしたのである。しかし、総称文や、習慣習性の現在時制の文は真偽値を持っているものであるが、HP の文は、知覚内容を表しているのであって、真偽命題ではありえないとすべきである。樋口が、眼前の動作は現在時制では表されないとしたが、それはあくまで、真偽命題をもつ文の場合であり、いわば、文として未分化の状態である、知覚を表す文についてはあてはまらず、HP はむしろ無時制の文であると考えられる。

確かに、視点移動説よりは、樋口の説のほうが、問題となっている “This scruffy-looking student comes into my office yesterday and says he wants a loan.” の文の説明がうまくいくかもしれないが、だからといって、この文だけのために樋口説を採用するのはあまりに問題がありすぎるといわねばならないだろう。

(6) 注(2)を参照のこと。

用例出典

松本清張『地の骨（上）（下）』	(新潮文庫) 新潮社	1975
松本清張『ゼロの焦点』	(新潮文庫) 新潮社	1971
松本清張『時間の習俗』	(新潮文庫) 新潮社	1962
松本清張『蒼い描点』	(新潮文庫) 新潮社	1959
松本清張『告訴せず』	(文春文庫) 文藝春秋	1978

- 松本清張『十万分の一の偶然』 (文春文庫) 文藝春秋 1984
 松本清張『詩城の旅びと』 (文春文庫) 文藝春秋 1992
 松本清張『山峡の章』 (角川文庫) 角川書店 1992
 Follett, Ken. *The Hammer of Eden* Fawcett Books 1998

参考文献

- 池上嘉彦 (1989). 「日本語のテキストとコミュニケーション」『日本文法小事典』大修館書店, 245-266.
- 糸井通浩 (1982). 「『歴史的現在 (法)』と視点」『京都教育大学国文学会誌』第17号, 47-55.
- 岩崎 卓 (1995). 「従属節のテンスと視点」『現代日本語研究(大阪大学現代日本語学講座)』第2号, 67-84.
- 尾野治彦 (1999). 「ノテ節、カラ節のテンスについての覚書き－岩崎の「主節時主語視点」をめぐる－」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第31号, 51-97.
- _____ (2000). 「日本語知覚補文テンスについての覚書き－日英語の歴史的現在用法との関連において－(1)」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第32号, 25-51.
- 尾上圭介 (1987). 「日本語の構文」『時代と文法(国文法講座, 第6巻)』明治書院, 57-75.
- 葛西清蔵 (1998). 『心的態度の英語学』リーベル出版.
- 金田一春彦 (1950, 1976). 「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 5-26.
- 工藤真由美 (1995). 『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房.
- 甲田直美 (1998). 「接続詞と物語叙法」『表現研究』第67号, 19-26.
- 澤田治美 (1997). 「日本語知覚補文のテンスの解釈」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房, 23-37.
- _____ (2000). 「チャレンジコーナー」『言語』2月号.
- 曾我松男 (1984). 「日本語の談話における時制と相について」『言語』4月号, 120-127.
- 田中瑩一 (1976). 「現代日本語の文章にあらわれる文末の現在形の用法」『国語史論集 (大坪併治教授退官記念国語史論集刊行会編)』表現社, 419-437.
- 塚本倫久 (1990). 「英語の現在時制について」『ことばを考える2 (愛知大学言語学談話会)』駿河台出版社, 87-106.

- 中畠孝幸 (1995). 「現代日本語の連体修飾節における動詞の形についてール形・タ形とテイル形・テイタ形ー」『人文論叢(三重大学)』第12号, 23-32.
- 樋口万里子 (1995 a). 「Viewing HP and the Present Tense in English」『“Viewpoint” : 認知言語学の視点』(日本英語学会第13回大会ワークショップハンドアウト)
- _____ (1995 b). “Static Image and the Present Tense in English”『九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学篇)』第8号, 67-100.
- _____ (1998). “The Simple Present Tense Used as Historical Present in English”『九州工業大学情報工学部紀要 (人間科学篇)』第11号, 59-94.
- 牧野成一 (1996). 『ウチとソトの言語文化学ー文法を文化で切るー』アルク.
- 松村瑞子 (1993). 「日本語の時制と省略性」『言語学からの眺望』九州大学出版会, 405-419.
- _____ (1996). 『日英語の時制と相ー意味・語用論的観点からー』開文社出版.
- Declerck, Renaat (1991). *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusya.
- Leech, Geoffrey N. (1987²). *Meaning and the English Verb*. London : Longman.
- Schiffrin, Deborah (1981). “Tense Variation in Narrative,” *Language* 57, 45-62.
- Wolfson, Nessa (1979). “The Conversational Historical Present Alternation,” *Language* 55, 168-82.